

蕭新煌

台湾の3度目の政権交代の真の意義

二〇一六年一月一六日の総統選挙と立法委員選挙では、民進党がいずれにおいても勝利を収め、初めて「完全執政」、すなわち総統と立法院（国会）における過半数の議席の獲得を実現した。これは台湾において、一九八七年の戒厳令の解除から三〇年、一九九六年の国民による総統の直接選挙から二〇年のなかで、三度目となる民主的かつ平和的な政権交代を告げるものである。過去二度の政権交代は二〇〇〇年と二〇〇八年に行われた。台湾は今後、第三波となる新たな民主主義の時代に入り、民主主義をさらに明確に定着させることになる。

選挙前から選挙後にかけて、「新しい政治」という言葉が、二〇一六年の二つの選挙の意義と変化の描写によく用いられてきた。この言葉は政治構造の若い世代へのシフト、新人の参入、そして脱特権化を示している。選挙後、立法院の権力構造は一新され、新たに時代力量という政党が出現し、数多くの新しい顔ぶれが国会の議席を獲得した。このうち民進党の新人立法委員二〇名は国会のアシスタントの経験をもっている。一方、国民党のベテラン立法委員の多くは落選した。

二〇一六年の選挙の結果を十分に理解するには、二つの角度から考察する必要がある。ひとつめは、二〇〇八〜一四年にかけて進んだ、台湾の市民社会諸団体の再動員と結集である。彼らは、馬英九率いる国民党執政下の経済の失敗、民主主義の沈滞、そして過度の中国への傾倒という三大失政を再三にわたり厳しく批判した。このうち、重要かつ規模の大きな抗争は野イチ

ゴ運動（「野草抵抗」）、親中メディアによる独占への反対運動（「反親中媒体壟断」）、反核デモンストレーション（「反核示威」）、白シャツ隊の座り込み（「白衫軍静坐」）、そして三八ひまわり市民運動（「三八太陽花公民運動」）である。こうした反権力、民主主義の救済を政治的に訴える市民運動のエネルギーが、二〇一四年一月の県市長選挙で一気に噴出した。この選挙で国民党は大敗を喫し、一年あまり先の総統選挙を前にして、早くも深刻な敗北の様相を晒すことになったのである。

二つめは若者、いわゆるミレニアム世代の政治力である。二〇一二年歳の若者の投票率は二〇〇八年の五〇％から上昇を続け、二〇一二年には六〇％、二〇一四年には七〇％に達している。今回の選挙ではさらに七四％にまで上昇し、全国の投票率の六七％をすでに上回るようになった。

このように、市民社会の力と若い有権者の覚醒がなければ、台湾における三度目の政権交代はなかっただろう。

最後になるが、今回の選挙の深層にあるもうひとつの意義は、台湾の新たな国家アイデンティティーの高揚と凝集である。そのひとつは、台湾は独立することが自然である、すでに独立していると考えられる若い世代（「天然独」と、独立はもぎ取るものと考えられる古い世代（「挣扎独」）の合流である。こうした合流が、国民党が選挙に敗れた原因であり、さらにいえば民進党が選挙に勝利した後に向き合わなければならないメインスタリームの意識なのである。

しょう しんこう／中央研究院社会学研究所特聘研究員

アメリカ・ニューヨーク州立大学バッファロー校社会学博士。中央研究院社会学研究所所長、台湾社会学会理事長、台湾東南アジア学会理事長、総統府国策顧問、行政院文化建設委員会委員などを歴任。『我們只有一个台湾：反污染、保育與環境運動』（台北：圓神出版社、1987年）など著書、論文多数。